

- 漫筆漫歩
- 海外からの眼

t・f

外国文学研究の危機とチャンス

相澤啓一

人文社会科学研究所助教授

日本の大学における外国文学の研究・教育は、大きな曲がり角を迎えている。私の所属するドイツ文学畑は戦前フランス文学と並んで一世を風靡しただけに、近年の斜陽傾向がいつそう目立つが、他言語でもさほど事情が変わるとは思われない。二昔前であれば、作家を目指す学生の多くが気概を持って独文・仏文の門を叩き、語学力と文学の両道をめざしてテキストと格闘をしたものであったが、現在では「ドイツ文学を専攻しています」などと言おうものなら、いやもしかすると文学のみならず哲学とか歴史といった人文系の学問を専門とするだけで、世の中に役立ちそうもない変わり者扱いされかねない。かつて優秀な女子学生たちが押し寄せた有名私大英文科の多くもはや以前の華やかさを誇ってはいないし、文学研究で博士号を取得してもなかなか就職が難しい。大学とは、一方で学生が自分のやりたい学問やテーマを自ら選んで追究

できる場所であるが、他方で社会がどのような人材を求めるかのニーズが歴然と反映される場でもある。実際、私大などでは外国文学領域の組織改編が始まっている。外国文学研究はもはや日本社会にとっては不要なのだろうか？

たしかに、外国文学研究の凋落はある意味で歴史的な必然である。日本は明治維新後、英独仏を中心とする欧米の文明・文化を一挙に受容しようと奮闘した。エリートたちには、その専門が医学であろうと法律学であろうと、まず外国語を習得させ、文学・哲学などの「教養」も身につかせたわけで、岩波文庫に代表される外国文学の多読は必須だった。外国文学研究は概して未熟な水準だったが、だからこそ教員は身分安泰、学生も就職に事欠かない古き良き時代であった。こうした意味での外国文学研究へのニーズであれば、今では確かに決定的に低下したと言わざるを得ない。

しかし外国文学研究が危機に瀕している理由はそれだけではない。今一つの理由は、それが「外国語」による文学を扱っているという点にある。国際語として小学校でも履修が始まりつつある英語を別として、日本は今、英語以外の外国語を習得するニーズをほとんど感じていないという、世界でも極めて特殊な閉鎖社会である。「英語もろくにできないのに第二外国語を学んでどうする?」という殺し文句には相当の威力がある。英語以外の外国語教員の大半は、幼少時からその言語圏に暮らすといった特殊な環境にいたのでない限り、18歳以降に初めてその言語を接した人で占められている。そうした形での教員養成は、日本社会における各語学の能力水準に悪影響を及ぼし続けているだろうし、外国語で文学に接する機会をますます遠いものとし続けている。

外国文学研究の危機のさらなる理由は、それが「文学」の研究だという点にある。文学は一見、古今東西普遍の芸術だと思われがちだが、文学が大学等の高等教育機関で研究・教育されるようになったのは、哲学や修辞学より遙かに遅れた19世紀のことである。近代化を終え、文学や芸術が社会の中で果たす役割が決定的に変化してきた現在、文学研究そのものの新たなありようが問われている。一昔前の文学研究が、特

定の作家を偉人として崇め、個別の作品を「深く」研究することに没頭する傾向を持ち、結果としてナショナルアイデンティティの構築に寄与してきたのは、日本だけに限ったことではないが、現在ではそうした自足的な文学研究の功罪も反省され、文学研究のスタイルやテーマ設定それ自身大きく変化してきている。にもかかわらず、一般に「文学研究」と言えば昔ながらの作品没頭型研究スタイルがイメージされる傾向は根強い。スリリングな文学研究の最先端の知的認識が、専門化した外国文学研究の枠を超えて社会に発信される、といったことはなかなか起こりづらいのである。

外国文学研究の危機の理由の一つとして最後に挙げておくべきは、文学研究と語学教育との悪しき野合が解消されつつある事態である。本来、例えばドイツ文学研究とドイツ語教育とは二つの異なる専門分野である。日本の大学ではしかし、制度的に外国文学と語学教育を一つにまとめて行なってきた。もちろん、文学研究者がすぐれた語学教育を行なってきたケースも多かったし、研究と教育が相補いあう形となることによって大学での語学教育が「巷の語学学校」における単なる日常会話レッスンとは異なる高い知的レベルで行われてきたことも見逃せない。しかし最大の「メリット」は恐らく、選択必修に支えられた語学教育

コマを確保する制度によって、社会的ニーズが比較的低い文学研究者のポストが守られてきた点にあった。そしてむしろ、そのデメリットももはや看過できない。語学教育担当のポストにつきながら語学授業を苦痛と感ずる文学研究者は少なくないし、語学授業の軽視や語学担当教員に対する差別意識といった深刻な（そして学生からすれば驚くべき）事態が、各大学に潜む構造的な問題として日常化しているからである。その意味で、文学研究と語学教育の分離は当然の帰結ではあるのだが、とはいえ、ここで拙速に両者を切り離し、大学での語学教育をいわば語学学校化してしまうならば、両者共に制度的基盤を失い、異文化への窓口が壊滅的打撃を受けることも危惧される。単なる旅行会話を教える外国語教育なら大学には不要であるが、異文化への意識を育む重要な知的契機としての外国語教育は、今後も大学教育にとって中核的役割を占め続ける必要がある。外国文学研究と外国語教育の新たなシナジー効果のモデルが望まれるゆえんである。

そうした中で、本年（2006年）8月末、韓国ソウルで、200名を超える世界各国の、とりわけアジアの独語独文学者たちが一同に会してアジア独文学会が催された。そこに参加して興味深く思われたのは、韓国の独

文研究者たちもまた異口同音に韓国におけるドイツ文学研究の危機を嘆いたのに対し、中国のある独文学教授が、「危機」は「危」い状況を意味すると同時に、「機」すなわちチャンスをも内包する語であるとして、研究・教育の積極的な改革を主張した場面であった。ちなみにこの学会の全体テーマは「文化研究（Kulturwissenschaft）としてのドイツ文学研究」というものであったが、しかにとりわけ90年代以降、ドイツ文学研究はドイツ内外において、旧来型の個別作品研究から、ドイツ語を手段としてさまざまな文化現象を分析・考察する「文化研究」へとシフトしつつある。そもそもドイツ文学に関する学会がソウルで催され、アジアの研究者たちが当たり前のようにドイツ語で論じあうといったシーンを見ると、ドイツ文学研究がすでにドイツ人研究者だけの閉ざされた研究領域ではなくなり、それによってドイツ文学研究の活性化と新たな認識の多様な可能性がもたらされていることを改めて実感できるのであった。

21世紀の日本社会で外国文学研究が目指すべき姿も、こうした方向性の上にあるように思われる。すなわち、伝統的な作品解釈に加えて、内外のさまざまな文化現象をもテキストとしてトータルに研究対象とみなし、その解説・分析のためにまずは特定の言語や文化圏からアプローチするという

戦略である。実際、近年のすぐれた外国文学研究は、例えば対象領域を歴史認識やメディアにまで貪欲に拡大し、ディスクール分析やポストコロニアリズム理論を駆使して、現在の私たちにとってのアクチュアルな諸問題と取り組むものとなっている。

そうした中では、極めて高度な語学教育と連携した外国文学のカリキュラムの立て直しが必須の課題である。例えば「ドイツ文学研究」というときの「ドイツ」は、研究の対象領域を指すよりも、むしろツールとしてのドイツ語を指す言葉となってゆくこととなるであろう。換言すれば、文学概念を拡大することで、高度の語学力の持ち主が幅広く自由で学際的な研究活動ができる領域を確保することが、今後の外国文学研究の大きな使命となるのである。現在日本では、ドイツ文学畑に限らず、全国的に院生レベルの語学力の低下が深刻な問題となっているが、今後の外国文学研究にとっては、これまで以上に高い外国語能力の持ち主を育成することが必要不可欠となってゆくことであろう。

その一方で、ドイツ文学とかフランス文学といった旧来の各国文学的区分にはあまり意味がなくなってゆくことだろう。外国文学研究の対象領域となるのは、むしろ、国際化する世界の多様な文化現象の総体であって、研究者には、それを個別社会や言

語の観点から理論的に分析し、人文科学の共通の土台の上で議論できる能力が求められてゆくこととなるからである。

日本は今、国際化が進捗するかに見えて、実は急速に閉ざされた社会へと向かいつつある。英語以外の外国語に対する需要の落ち込みは、「多様性を駆逐する形でひた走るグローバル化」が抱える矛盾と危険を如実に反映している。アメリカに依拠した閉ざされた議論の枠組みだけが現実的とされる中で、世界各国から、例えばアジア各国から、自分たちがどう見られているのかに気付かないケースが増えつつある日本では、誤った政策に対する修正の選択肢が大きく減りつつある。国際化や産学官連携が進捗すればするほど、異文化に対するセンシビリティーや思考の多様性が失われてゆくのだとしたら、支配的言説に無抵抗に依拠するのではない強靱で多様な反省的思考を養うことこそ、外国文学研究が担うべきますます重要な課題となってゆくことであろう。いずれにせよ、人文科学の意義に理解を示さない人が増えれば増えるほど、その社会にとっては人文科学が痛切に必要なのだという逆説の中で、制度的危機を迎えている外国文学研究のアクチュアリティは、日本社会の中でかつてないほど大きなものとなってきているようである。

(あいざわ けいいち/ドイツ文学)